ヤスクニ通信　No.282　2023 年 10 月 20 日　例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　https://yasukuninotsudoi.christian.jp/

ヤスクニ・レポ　282
ヤスクニ探訪 2023 に参加して

荻野廣己（日本同盟基督教団　馬込沢キリスト教会　信徒）

１．探訪への圧力

西川重則氏の亡き後もヤスクニ探訪が続けられていることが頼もしい。先の「つどい」定例会において「最近は団体での探訪は係員が止めるよう注意している兆候がある」との星出牧師の話に靖国を批判する学習に圧力が掛かり出したなと危惧しそれなら小さくとも私も加わって、数の力で押し返そうと示威の思いで参加を決めた。少し時間に遅れて参道を進むと、大村益次郎立像の周辺にバラついた人の群れがある。その先方に星出師が頭をやや下げて何やら語っているのを見つけた。その一群はことさらそちらに体を向けては聞いているようには見えないので、これが本日の探訪グループとは思えなかった。近づくと同じような資料を手にしている。吉村氏も離れたところにいることに気づいて挨拶をした。直前に申し込んだ私に資料とトランシーバセットというのかそれを手渡し使い方を教える。そうか、今日の参加者は皆イヤホーンを使ってそれぞれがガイドから離れていても小さな声を聞き取っているので、固まった団体があるようには目立たない。このスタイルは今年が初めてではなさそうだ。ヤスクニ探訪は靖国合祀を批判する学習だから靖国神社に歓迎されるものではないので、遊就館の外であってもこちらも周囲に幾分かの警戒感を抱きながらイヤホーンからの説明を聞き、示された事物を見据えてしっかり学習している。工夫した対応に知恵があった。

２．参道、大村益次郎立像の意味

私が到着した時は大村益次郎立像からはまもなく移動したが、なぜ参道中央に建立されているのか調べてみた。彼は長州（山口県）出身である。医師である彼は適塾で蘭医学のほか語学、洋学を学び抜群の成績を得て塾長となりその後、長州藩士としての処遇を得て軍事会計、洋式兵法に実力を発揮した。彰義隊鎮圧、陸軍創立、国民皆兵提唱、靖国神社前身招魂社を献策、明治 2 年暗殺の傷により敗血症にて死亡。明治 26 年 6 月立像建立。招魂社は戊辰戦争において戦死した新政府軍側の将兵のみが合祀されている。戦死したものが祀られているものと思ったが彼は戊辰の役も終了し国内は一応収まった 9 月に襲撃を受けて二ヶ月後に死亡した。吉田松陰、坂本龍馬、高杉晋作なども合祀されているとのこと。そもそも長州が献策したものであるので判断は長州側にあり、政府軍に貢献した者が選ばれる。益次郎は維新受難者として合祀されたとのこと。戊辰戦争は幕府側も新たな時代を模索して戦ったのだが、新政府軍、すなわち天皇を戴き、錦の旗を翳している側の者が招魂社に祀られる。会津も、奥羽列藩同盟軍、彰義隊は一人もいない。維新の功労者であってもその後に佐賀の乱、萩の乱、西南の役など反乱を起こして死んだ者も祀られていない。像自体高さ 10 尺（3.03m）基台含め総高さ１２ｍの立像は靖国神社とは時の政府の方針が絶対正として、これに殉じる者が天皇に直属しているものとしてその功績を讃える所に他ならないことを示している。

一方で鹿児島生まれ育ちの私としては西郷隆盛以下戦死した兵卒が靖国に祀られてないことを幸いとしている。高台の南洲墓地には西郷を中心に桜島を向いてぎっしりと墓が並べられ、肩を寄せ合っているかの情景が微笑ましい。階級があり靖国の暗い建物に閉じ込められている「命（ミコト）」らと比べて、国家護持からは解放された明るさを感じる。今年 4 月には桜島にて育苗している実生の山桜を墓地片隅に仲間で一本植えた。300 年は育つという。軍備の整った新政府の過ちに義を正そうとした負け戦覚悟ではあったがやるだけやったんだという潔さ。

翻って私達クリスチャンは神の義を明確に掲げる強さと結束と覚悟を持ち主張しているか問われる。西郷の人望に惹かれるも、我々はキリストにつく。真理であり命であるキリストに従い、福音の戦いもこの明るさと覚悟と豪胆さを持って臨みたい。

３．遊就館

探訪はじっくりガイドされた。社に向かって進むと左右に大灯籠があり、左が陸軍の戦闘場面、右が海軍の戦闘場面が絵巻燈籠として浮き彫りがある。境内を右に折れていよいよ遊就館に入る。星出師は最後までツアーが続くかと笑いながら皆に断りを入れて慎重に入館。結果としては館内には監視する係員もなく終了まで見学できた。イヤホーン作戦が功を奏したのであろう。ガイドは常にヒソヒソであり他の客にさえ知られることもなかったようだ。新館から旧館に回廊し、また新館に帰る順路のようだ。建設３代目の旧館は築地本願寺を設計した伊東忠太の監修であることを知って得した。陳列を内包する建築物の空間、壁、天井の作り、階段などここを伊東や担当建築家らが国家事業として昭和 7 年工事中の中を神妙に歩き回ったに違いない。満洲事件は勃発するも支那事変、そして太平洋戦争へと規模拡大戦死者及び資産損失が桁違いに拡大することは誰も

が思いも寄らなかった。
　靖国神社の意義は国に殉じた者の御霊（みたま）を鎮（しず）め、その業績を語り伝えることにあるという。国とは天皇である。証として神殿の扉には大きな菊の紋が設置されて金色に光っている。遊就館は軍事博物館である。使用した軍備の陳列が満載されている。歩き進むとなぜ米国に対して宣戦布告せざるを得なかったかの経緯を掲示してある。1941年に米国内の日本人の資産凍結、屑鉄輸出規制、石油輸出規制などの経済制裁を受け、半年も経たない12月には真珠湾攻撃を決行し破滅へ向かう。それだったら2006年10月に採択された国連安保理決議によって国際的制裁を受け、さらに2016年、2017年に制裁が強化された北朝鮮金正恩体制の方がずーっと辛抱強く賢いと言える。それまでの遊就館が示しているように勝戦の連続でまたもや米国連合軍に勝利を得ると思ったのだろう。破竹の勢いで欧州を席巻していたドイツ頼みでもあったと聞く。ドイツ軍は1941年6月にソ連に奇襲するも11月末には冬将軍に阻まれてモスクワの５０㎞手前で勢いを失ったがその情勢を日本軍部は把握せず、12月には無謀にも海軍連合艦隊をハワイに進めた。遊就館は世界情勢とを比較することなく戦果品を並べ自信過剰を生み出していたし、軍と軍に抑えられた政府は情勢判断を誤り情報を欠落した。これらによって戦争は途方もなく拡大し「国に殉じ、ふるさとの父母を守るための尊い死者」を生み出したのである。

４．「検証」こそ必須

　星出師が準備した資料には靖国神社発表の各時期の戦死者等合祀の数が示されている。明治維新では7,751、日清戦争13,619,日露戦争88,429、満洲事変17,176、支那事変191,250、大東亜戦争では桁違いに2,133,915名となる。階乗的増加現象である。次に戦争すれば破滅的数値となることを歴史は示す。1931年に満州事変を起こしたときには1945年までの集結しない拡大一方で、戦死者の数は思いも寄らないことだったが、今日小さな戦争勃発を招けばその先は予想できない。
　遊就館は将兵の戦死者の功績を顕彰し、「遺徳」を「顕彰」するところである。しかし、いかにして戦争が始まったか、戦争を止めることができなかったか、軍人と言えど家庭を持つ人間であるし、駆り出された学生、犠牲になった民間人、及びこれら頼りとする家族を失い、財産を破壊された多くの日本人、何よりも侵略、蹂躙された近隣外国人の悲憤と絶望を「検証」はしない。靖国神社及び遊就館は戦死将兵に「英霊」の蓑を被せ「顕彰」するが、将兵及び民間人の裸の現実を悼みつつも戦争の悍ましさを憎み、戦争による犠牲者を起こすことがないように生の歴史に学び、叡智を集め「検証」しなければならない。

２０２３年９月１５日奨励
使徒20:25–38「神が買い取られた神の教会」
柴田智悦牧師（同盟　横浜上野町教会）

　教会は「神がご自分の血をもって買い取られた神の教会」です。教会の主催者は神である主ご自身です。主がご聖霊を通してクリスチャンを起こしてくださるのです。それでも、まず福音を伝えなければなりません。パウロは全力を尽くして伝えました。それにもかかわらず、なお教会は、神が「買い取られた」教会です。私たちは、神である主によって買い取られた者なのです(1ペテロ1:18,19)。かつて罪の奴隷であった私たちは、キリストの尊い血、という代価によって、神である主に買い取られたのです。従って悪魔はもう私たちを買い取ることはできません。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるからです(ガラテヤ2:20)。
　まず「あなたがたは自分自身…に気を配りなさい」と勧められています。本当に気を配らなくてはならないのは、まず自分自身です(1ペテロ1:13)。次に「群れの全体に気を配りなさい」です。自分自身に気を配ることができる人が、群れの全体に気を配ることもできるのです。その上で、「あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます」と言われています。教会を神のことばにゆだねるのです。つまり自分から主に向かって手離すのです。信じるということはこの神の恵みのみことばにゆだね手離すことです。そして祈りつつ待つのです。みことばには「御国を受け継がせる」力があるからです。
　さらに、「労苦して、弱い者を助けなければならない」のです。その根拠は「主イエスご自身が『受けるよりも与える方が幸いである』と言われたみことば」にあります。アッシジのフランシスコは「ああ、主よ、慰められるよりも慰める者としてください。理解されるよりも理解する者に、愛されるよりも愛する者に。それは、わたしたちが、自ら与えることによって受け、赦すことによって赦され、自分のからだをささげて死ぬことによってとこしえの命を得ることができるからです」と歌いました。このように与える者が受けるのです。それは、すべてのものを与えてくださったすえ、死のほかなにも報いを受けられなかったにも関わらず、十字架の上にあげられて罪を赦してくださった、イエス様ご自身(教会福音讃美歌98)から来る賜物なのです。